慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 馬場辰猪小伝（上） |
| Sub Title | Biography: Tatsui Baba (part I) |
| Author | 西田, 長寿 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1952 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.7 (1952. 7) ,p.479(43)- 494(58) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19520701-0043 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520701-0043 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なお合衆國戰後の經濟豫測に關しては篠原三代平助教授による周到な展望を參照せられ度い。「經濟研究第3號一九五〇年七月」。

## 結　語

以上消費者需要について asset holding の重要性を強調した。生産者需要についても同樣なことが言える筈、であり、その定式化と計量方法が確立されれば資産評價の方式を會計學的 convention から經濟理論的なものに發展させうるし、さらに social accounting にも光明を與えるものとなることを疑わない。(註)

（註）例えば R. Stone; The Role of Measurement in Economics, 1951. P. 43 の問題提起を參照。

（一九五二年二月）



# 馬場辰猪小傳（上）

西田長壽

## 1　家　系

『馬場辰猪自傳』（以下單に『自傳』と呼ぶ）では、その初めに、大變ながい家系記がある。それはむしろ急進的な自由民權思想家の彼の書いたものとして不思議にさえ思われる。しかし、當時新しく唱えられていた、ダーウィンの遺傳學說、進化論、更に彼に最も影響を與えていると思われるスペンサーの社會進化論等と考え合せると理解のつくことである。卽ち彼は、自らの性格、能力の主たる部分の形成を祖先からの遺傳と進化の力として說明しようとしたのであろう。『自傳』冒頭において

「若き者の心は、成人の心に取つては極めて瑣細であるべきやうな事柄の影響を受けたり、さういふ影響の爲めに、その將來の行路が左右さるゝに至り勝ちなものである。馬場辰猪の場合に於ても、さういふ影響が、善惡はとにかく、彼の若き心に强い効果を起したらしく思はれる。

勇士としてその事蹟を日本の歷史に載せられた祖先の功勳の物語に激勵されて、さういふ境遇の下にゐるのではなかつたならば商業家とか科學者とかになつたかも知れなかつたその若者は、抵抗し難く政治の領域へと導かれて、自分の國の爲めに何事かをなしたいといふ志望を以て心を滿たさるゝに至つたのだ。(1)」

と、彼が生涯の進路を決した原因を說明している。

馬場氏は武田信玄麾下の名將と謳われた馬場美濃守氏勝の後である。信玄の死後、その子勝賴が名將の器でないのを知つて、氏勝は長篠の戰にむしろ進んで討死をえらんだので、一子信義は免れて土佐の長曾我部氏に投じた。(2)

この後を孤蝶氏の註によつて系圖にすると

- 平信義（平兵衞）
  - 信直
    - 信勝
    - 信重
      - 氏信
        - 氏幹
        - 氏忠
        - 氏義
        - 氏興
          - 氏綱
- 氏高
  - 氏明
    - 源八郎
    - 辰猪
    - 菊彌
    - 勝彌
    - 駒

さて、信義は長曾我部氏が土佐を統一するに及んでその麾下になつたが、慶長五年長曾我部盛親が國を失うに及んで浪人となつた。その後二代信直、信勝と仕を求めなかつた。そして信勝の弟信重が明暦元年出でて、山内忠義に仕えることになつた。これから後、馬場家は累代山内家に仕えて明治に至つたのである。

しかしながら、山内氏における馬場家の身分は低いものであつた。信重の子氏信は之を慨して致仕し、しばしば京都に上り、學を淺見絅齋に修め、書を持明院前大納言基時に就て習つた。而して書は一家をなし雲山とも一梯とも號しその名は時の天皇にも知られ、淺野家の如き祿五百石を以て召抱えようと申出た程であつた。かく有名になつては、山内家でも捨てておけず、正德元年、山内豐隆は再び士分として召し出した。しかし祿はなお五人扶持であつた。たゞ、一梯は意志强固で學問に努めたのみでなく、よく理財の方を立て家計を豐にした。彼はまことに馬場家再興の祖であつた。

氏信の跡は長子氏幹が繼いだが、享保一三年、三十四歳の若さで死んだので、氏信の四男十四郎が家を繼いだ、之が氏興である。氏興は、所有新田貳百石分を知行地に引きなおすことを許可せられて留守居組に進められ、氏信以來ここに宿望の本士となつた。享保一八年のことである。

氏興の子氏綱は器用な性質で、江戸の藩邸や藩祖山内一豐を祀つた藤並宮の建築監督を務めた。書は楷書は達者で、銅印を鑄ることも得意であつた。

かように馬場家には文學や藝術の趣味のある人が多かつたのであるが、氏綱の子氏高こそは辰猪に最も重大な感化を與えた人である。前述の引用にもあるように、辰猪に祖先の武功をして聞かせたのは實にこの人である。氏高は通稱を源馬といつて、有用の財であつたが、直言正議の士であつたので、時に藩の重役にも憚かられ、しば〳〵その役を變えた。しかし、その志操の高潔の故に山内容堂の世子豐範の傅となつたほどである。源馬氏高は、また手工は驚くほど多能で、刀劍の鍔、縁、頭、こじり等の刀劍附屬品の製作では、專門の名士の壘を摩するほどの手腕をもつていた。武藝では特に弓術に秀でていた。

のみならず、彼は文學的才能もあつたらしく、こういう人から辰猪がその先祖の武功談や軍談や、時には源馬自作のお伽噺まで聞かされたのであるから、その感化は確かに大きかつたに違いない。

（1）『自傳』（『改造』大正一三年七月一日發行）

（2）孤蝶註によると辰猪が家系を記するに至ては、餘り家記を見て居ないとのことである。よつて筆者は家系に關する限り自傳の孤蝶註を重んじた。

## 2　出生――少年時代

辰猪は、この源馬氏高の長子來八氏明の二男として、嘉永三年五月十五日、高知市中島町西詰俗稱金子橋の邸で生れた。母はとら子と云つて同藩の葛目隼太の長女であつた。

父は美目秀麗で、弓、馬、劍をよくしたばかりでなく、書・畫・手工においても立派な才能をもつていた。寛大な性質と大酒のため用いらるゝに至らず、維新の時容堂の馬役をつとめた位に止まつた。別に文字があるといふほどではないが、昔の軍記、平家、盛衰記、三國志、弓張月などの面白いところは暗記していた。こういう風で、馬場家では、氏綱あたりから、儒學教育の外に、文學、美術の方面に及んでいたと孤蝶が自傳の註にかいている。母は十五歳で馬場家に入り、二十一歳で辰猪を生んだが、思考の綿密な、言語の明晰な人で、しかもなか〳〵しつかりした婦人であつた。

成年の辰猪は、當時の政治家としては、趣味も教養の廣い方であつたが、これは馬場家の遺傳と云うべく、その志操や氣節では祖父源馬に負うところ多く、その容姿では父來八の、その雄辯は母とら子から傳はるところであるとされている。[1]

辰猪自ら記するところによると、幼年時代「寡言沈默の性質であつたといふ外、何等著しき特徴はなかつた。」[2]とあるが、孤蝶の多くの註を綜合すると、相當の腕白で、强情で、是非の判斷は鋭く、自己の主張は固持して讓らなかつたが、それでいて情け深いところがあつたということになる。しかし、讀書がすきだという方ではなかつた。十三歳になつて母から初めて「いろは」を習つたといふことからもこれは窺われる。

十四歳で藩校知道館に入つたが、こゝでの教育は漢籍の二三と武術であつた。十五歳のとき、藩主山内豐範の上阪に際し、父の異母弟、氏連に伴われて大阪に行つた。これは慶應元年のことで、蛤御門の變の翌年にあたり、大阪の街にも、いろ〳〵の侍や浪人が頻繁に往來していた。辰猪は郷里高知に比して遙かに廣い美しい街を見たと同時に、そこにすゝんでいる革新の氣を感得せずにはいられなかつた。然し、この時は父や兄の一身上の變化で、滯阪三ヶ月で歸里に歸つた。

父と兄との失脚は辰猪を奮起せしめた。それからの一年間、彼は郷里にあつて漢學の修業と擊劍、洋式兵法に全力を注いだ。

（1）自傳（『改造』大正一三年七月一日發行）

（2）同書（同）

## 3　福澤先生に就學

慶應二年、辰猪十六歳のとき、藩費で江戸留學を命ぜられた。辰猪は、同行の私費留學生百々幸彌と共に、その年三月三日高知を發し、叔父氏連が機關方である藩の蒸氣船で大阪に出て、伏見、京都を經て東海道を歩き、江戸鍛冶橋の藩邸についたのは、京都を出てから十二日目であつた。

辰猪の使命は、海軍機關學の修業であつたが、それに適した

學塾は幕府施設のものゝうちにもなかつたので、意を決して英學を修めることゝし、鐵砲洲の奥平邸内にあつた福澤諭吉の塾にはいつた。當時の同塾の教授法はまことに不完全なものであつた上に塾生の身持などもよくはなかつたらしい。

此間にあつて彼は、開成所版で俗に木の葉文典と呼ばれた小片の英文典から學び初め刻苦精勵した。塾頭の小幡篤二郎は特に彼の勤勉に嘱目して自ら物理や地理の原書を教えた。彼の最初の慶應義塾在學は慶應二年の春から同三年の十二月に及んだらしいが、その間、辰猪はカツケンボスの北米合衆國史を讀み得るまでになつていた。

辰猪は、江戸の薩摩邸が燒打されてから三日目、世上の不穩に感ずる所あつて、江戸を立つて郷里に向つた。京都へついた時は、慶應四年（明治元年）正月三日の鳥羽伏見の一戰が了つて、京都は徳川征討で湧き返つていた。彼は京都に三週間滯在してから土佐に歸つた。

しかし、まだ自ら社會で活動する時期でもないし、もつと勉强したいと考えた辰猪は、藩の重役に對して長崎遊學を願い、かつ、その許可を得た。

辰猪が長崎へ出發したのは、明治元年四月らしく、長崎でも英學を修めようとしたのであるが、その便益はあまり備つていなかつた。唯、僅かに宣教師フルベッキの援助で、合衆國史と萬國史とを讀んだ程度である。のみならず、こゝに集つた學生もあまり風儀のよい方ではなかつた。辰猪はそういう學生とは度々爭論したが、學力では一頭地を抜いていたので、他の者を教えた、と述べている。長崎の滯在は九ヶ月で、再び江戸へ上ろうと決心した。



丁度、高知藩の國産方の役人として長崎に來ていた岩崎彌太郎が大阪に行くということを聞いたので、辰猪は岩崎に希望を話して大阪まで同行して貰つた。大阪につくと、彼は所持の書物などを賣拂つて旅費を調えて、江戸へ向つた。

江戸についたのは、明治二年正月頃であるが、今度も福澤塾に入ることにした。福澤先生の塾は、このときは既に芝新錢座に移つて「慶應義塾」と稱していた、生徒も二百名を越える大發展振りであつた。辰猪は、こゝで、熱心に勉强を續け、渡英前には塾の教師の地位にすゝみ、地理書・窮理書の會讀や素讀を指導した。

## 4　英國留學

明治三年、高知藩で歐州へ留學生を派遣することゝなつたので、辰猪もその選に入るよう願い出でた。留學生の人選には板垣退助の發言が重きをなして、明治維新の會津戰爭に彼の下で奮戰した眞邊戒作をはじめ、國澤泉（後に新九郎）、松井正美、深尾倍作、谷神之助、川上友八正躬がまづ選ばれた。ところが、谷神之助、川上友八が加賀藩士との鬪爭がもとで自刄しはてたので、その補缺として辰猪の希望は達せられた。自傳では、この人選について板垣が會津戰爭の論功賞的意味を含めたもので、人を視る明がなかつたと非難している。

さて、彼等は辰猪が最も輕蔑した眞邊戒作を長としたまゝ歸國する英國人ローダー（Lawder）[1]を總監督に依頼して、明治三年七月二一日、パシフイク・メール號で、横濱を出發した。そして海上十四日を費してサンフランシスコに着き、鐵路ニユーヨークに至り、それから英國に向つた。辰猪等が倫敦についたのは、明治三年九月の下旬であつた。

ロンドン着後、宿舍の都合などで、ダニエルと云う宣教師に伴われて、ラングレイと稱する小村に移り、六ヶ月間熱心に英語を勉强した後、ウイルシヤ州の通商市ウラールミンスターに轉じ、そこのグランマー・スクールで[2]、幾何、地理、歴史を學んだ。かくて半年、彼等はいよ〳〵ロンドンに轉じ、それ〴〵藩命の專門學科を勉强することになつた。辰猪は、ロンドン・ユニヴァーシテー・カレッヂの理科に入學した。自傳の叙述から考えて、大體、四年の末頃かと思う。辰猪は、やはり海軍の機關學でも修めることになつていたらしく、またそれまで、政治、經濟、社會、歴史というような方面の素養のない眞邊が政治學を專攻することになつていたらしい。いま少し月日を經てからのことゝ思われるが辰猪は國澤には洋畫の修業をすゝめ、國澤もその言を入れて洋畫を習つて歸つたが、この方面に充分活躍するに至らずして早く世を去つた。眞邊は最後まで馬場と競爭するつもりで政治學をやつたらしいが、結局、辰猪の敵でなく、明治一三年に自殺して了つている。

それはとにかく、通商條約改正交渉と云う使命を帶びた全權大使岩倉具視の一行が、明治五年七月一四日ロンドンにつき、同年一一月一六日まで英國に滯在した。が、この間、辰猪の學才が認められて、日本政府留學生に採用、法學を研究することを命ぜられた。

そこで、彼はロンドン大學を去つて、テンプル法學校に入り、またロオヤス・チエンバアに通ひ法學特に羅馬法と不動産法の研究に心をひそめた。おもうに、彼の政治學、經濟學への志向は、既にその慶應義塾在學のときに始まつたと解す可きであろうが、こゝに至つて完全に自らの運命を轉換する機會を得たのである。

辰猪の最初の英國留學は一八七四年に了るが、その間、彼はノーリッチに開かれたる英國社會學協會の大會に出席している。これは、同會頭ホートン卿の紹介によるものであるが、こゝに彼が英國社會學會の主要人物の風貌に接し得、且學會運營の方法等を窺い得たことと、知識の獲得に熱心であつたことなどを想像し得よう。彼はまた、日本文典初歩（An Elementary Grammar of the Japanese Language.）を著はし之を英國知名の士に贈つている。この著は、森有禮が「日本の教育」

(Education in Japan) の序文に於て「日本語は到底支那語を待つに非れば其用を爲す能はず、國家の法令の如きはトテモ日本語にて言明すべきにあらず、故に日本の普通教育には日本語に英語を代用すへし」[3]と主張しているのを反駁するために書かれたものである。而して山田孝雄博士は、この書について「百頁許の小册子であつて、內容は簡單を主としたけれども、先づ文字から入つて品詞論と文章論とに別れ品詞論中には助詞を Postposition と譯して出してい、文章論には文の組織に關する規則十八條をあげ、なお終に數多の練習問題を加えてある。その說には今日から見て贊成出來ないこともあるが、しかし、簡單に書いてはあるが、要領を得たものである。[4]」と述べ、また「眞に日語全般にわたつた法則を述べたもの[5]」としてはこれが最初のものであり「それまでの間に日語法の上に大きな事功をたてたのは馬場辰猪を以て第一とせねばならぬ[6]」と推賞されている。

なお、記憶すべきことは、彼がこの頃基督教が英國社會の堅實さに及ぼせる影響を高く評價し、自らも、よく教會に出入、殊にユニテリアン派の教旨を是認していたことである。

この時期における彼の仕事として、ロンドンにおける日本留學生會の組織がある。この頃ロンドンには百餘名の日本留學生がいたが、彼等の間には藩閥的意識が強く、互に對立する風があつて親愛共同の精神にかけていた。殊に薩藩人と土藩人との



軋轢が甚しかつたのである。辰猪は之を甚だ遺憾として、彼等一同が互に和睦協同するような一倶樂部を組織しようと考え、熱心に諸法を說きまわつた。かくて、明治六年九月、ロンドンのゴールデン・クロス・ホテルでその發會式をあげ、辰猪は開會の主旨を述べた。これが彼の日本語演說の最初である。この日本人學生會は、ロンドンのジャパン・ソサイティの先驅をなすのであり、日本に於ける共存同衆の起源ともなるものであるが、辰猪は暇あれば常に此の會の世話をしたのであつて、彼が前に著した日本語文典について、會員に對して講義し、日英兩國語の差異の修得を助けたのである。

明治六年一一月、政府は、官費留學生を廢することゝなつたので、辰猪も行李を纏めて歸國することゝなり、明治七年一二月横濱に歸着した。

留學五年間、故國における經濟、社會、政治の變化は辰猪の眼を驚かした。當時は民撰議院論爭が喧しく、政黨としては第一回の愛國社が結成されていた時で、辰猪は一部の人々からは「この運動に參加し、役員になるように[7]」すゝめられたが、彼はこの運動に參加している人々が無條件に信用し得ないことと、この運動は、日本人としてはなおその時機でないと云う考えから、右の勸告には從はず、寧ろいま一度英國に留學し、英國法の研究を遂げた方がよいと考えたので、彼はこの志を舊藩主山內家に告げたところ、幸に容れられたので再渡英は實現することゝなつた。

そこで、辰猪は、明治八年一月二〇日東京を出立して、京都、大阪を經て二月二三日土佐に歸り、滯留十三日、今度は、弟菊彌、妹駒を伴つて三月七日鄕里を出發上京した。そして辰猪は菊彌を慶應義塾に入らしめ、また駒を福澤先生に托して出發することゝなつた。

かくて、明治八年四月、佛國郵便船で出發、途中五十餘日を費して六月八日英國についた。

そして豫定の通り、英國法の研鑽に努め、ロオヤス・チェンバアに通つて熱心に勉强を續けたのである。

彼はこの留學中、二つの著述と種々の日本古典を翻譯をして、日本の紹介に努めている。著述の第一は、「日本に在る英國人―日本人が彼等に就て何う思つて居たか、又今は何う思つて居るか」である。この書は、原稿のうちに英人ハム氏の閱讀を受け、ツルブチア商會（書肆）によつて、明治八年一〇月二七日附で出版せられ、英人知友に呈すると共に日本に在る師友にも送られた。この書の內容は、安永梧郞著『馬場辰猪』にくわしい。出版後二ヶ月當時の『郵便報知新聞』第八七〇號（明治八年十二月二九日）以下に譯載されたが完結しなかつたものである。要するに、日本及び日本人に對する英人の劣等視に抗議し、不平等條約の改正が日英兩國親善にとつて必要であることを訴えたものである。著述の第二は「日本と英國との條約」(The Treaty between Japan and England) である。これは明治九年（一八七六年）六月五日發案、同年九月三十八日出版、ビーコンスフィールド (Disraeli, Benjamin, Earl of Beaconsfield.)、ダアビイ (Derby, Edward Henry Stanley, 15th Earl of Derby) グラッドストーン (Gladstone, William Ewart)、フォウセット (Fawcett, Henry)、ブライト (Bright, John) に贈呈している。これ等の人々は當時英國における屈指の政治家として或は學者として明治初期の我邦にその名を謳はれた人々であつた。辰猪は、この書を故國の恩師福澤諭吉や友人萬里小路通房、小室信介等に送ることも怠らなかつた。この論文は、當時慶應義塾から發行していた『家庭叢談』及びその後進である『民間雜誌』に抄譯揭載せられたが、後辰猪の存生中、山本忠禮、明石兵太郎が共譯、原著者馬場辰猪が校閱をしておいたものを、大阪興文館から、明治二三年一月、『條約改正論』として出版せられたのが、『明治文化全集』「外交篇」に收められた。第三の英譯のうち主なるものは、古事記の英譯で、これは、明治八年に思い立ち、明治九年一月（一八七六年）に出來上つたので、之を英國人類學協會の會長エドワード、タイロア (Tylor, Sir Edword Burnett) に贈つた。タイロア氏は、このために同會開會の席に辰猪を招き、氏自ら之に關する論文を朗讀すると共に、辰猪をして一場の演說するの機會を與えた。辰猪が古事記を英譯するに到りたる一

つの動機は、先の留學のとき、同じく英京に在つた赤松連城が「古事記」を讀解し、辰猪がそれを英文に書き改めて古事記の譯文を作つた。[8] 勿論、これを基礎に今回の英譯が出來たのであろう。そして特にこの問題を撰んで講演したのには、東西神話の同質性というような問題を論じ、日本文化の一端を紹介しようと企てたのである。

彼はまた、ブライトンで開かれた社會學協會に出席し「日本の治外法權及其人民に及ぼす弊害」に就て聽衆に訴え、會長エドワード・クレーシーは辰猪の爲にその場に於て此の問題に關して意見を述べているのである。

おもうに、辰猪のこの度の留學においてはたゞに英國法の研究に努力したのみならず、あらゆる機會を捉えて、日本に對する英國朝野の理解を求め、一日も早く條約改正の行はれるように盡力した中に、破邪顯正の氣慨を窺えると思う。

彼の第一回の留學中はグラッドストーン内閣（一八六八年一二月九日―一八七四年二月二一日）の時代であり、第二回留學中は保守黨のヂスレリー内閣（一八七四年二月―一八八〇年）であり、自由、保守の二大政黨によつて、交互に政權が授受せられ、愛蘭土問題を初め對土耳古政策を中心に議場の大論戰を見學、代議政治の如何なるものやを見學することが出來た。自由平和主義の典型的政治家グラッドストーンと進歩的保守主義の代表的政治家ヂスレリーの風貌に接したことは、彼に影響する所少しとしなかつたであろう。

正統派經濟學の大成者にしてその殿將でもあるジエー・エス・ミルが、その輝しき生涯を了つたのは、彼の第一回留學中の一八七三年五月八日であるが、辰猪は、スペンサー（Spencer, Herbert）フォウセット（Fawcett, Henry）を初め英國著名の士が彼の學績をたゝえ、その死を悼んだのを見て、今更のように學問の力の大さに打たれたと追憶している。私は、ミルの辰猪に對する感化を云々する知識はないが、辰猪が第二回歸朝の短かい故國滯在期間中、共存同衆の席上「日本婦人の狀態」と題して講演するが如き、確かにミルの「婦人の隷從」を讀んで感ずるところがあつたからであろう。

彼は、英國留學中、三たび巴里を訪れ、親しくフランスの政治情勢を視察し、あるときは佛國下院の議事を傍聽し、その議場混亂止まる所なく議長が鈴を鳴らして僅かに之を靜止しているのを目擊、有名なガンベッタ（Gambetta, Léon Michel）が、時の大統領マクマホン（Macmahon, Marie Edmé Partrice Maurice de,）に相對し、共和主義を提げて奮鬪せる勇姿にいたく感激したといい、また、巴里の歴史的名所を歴訪、就中、プラアス・コンコルトなどは、低徊去るに忍びず、彼をしてフランス大革命を追想せしめずにはおかなかつたという。

彼は勉學の傍ら、前の留學のとき組織した日本留學生會の世話に努力した。明治九年（一八七六年）の末には、東京大學から派遣された穗積陳重（入江陳重）、向坂兌、岡村輝彦、櫻井錠二、關谷清景、杉浦重剛、增田禮作、谷口直貞等八名の新留學生が到着したので、これらの人々を英國の社交界に紹介するためは可成りの力をつくした。

一八七七年一月の初め、辰猪は最初一しよに留學した眞邊戒作と國際公法のことで論爭したが、そのとき眞邊が辰猪の言に怒つて彼の面に唾したので、辰猪は翌日眞邊に佛國に赴いて（當時英國では決鬪が禁じられていた）決鬪を仕ようと申込んだが、眞邊が應ぜず再び爭論となつて、辰猪は所持のナイフで眞邊の頭部を切付けて了つた。眞邊、馬場の間は終生水火の交であつたが、「土佐偉人傳」の著者寺石正路は、二者の關係について「辰猪は學才に長け且つ英語の素養あり早くより泰西の事情に通じ已に政治經濟の諸書を窮め其進歩日一日に著し正精は猶日本武士の蠻骨の氣風を帶び寧ろ文學に短なり辰猪嘲りて曰く子の如き『ナポレオン』黨は宜しく佛國に渡りて士官學校に入れと正精怒り嚮かに諸學を修め之に抗せんとす遂に敵する能はず」[9] と述べている。

とにかく右の事件は、辰猪の少年時代からの激しい氣象を示すものであるが、後年、國友會の公開討論で、決鬪を討議し、議論の決せざるときは最後の決は決鬪によるほかないと主張しているのも、右のような經驗からであろうか。

辰猪は、このため一月七日から拘禁され、いろ〳〵取調を受けたが、結局、二月八日の公判で五十磅の保證金で處罰猶豫となり、英國を退去することゝなつたので、匆々、行李を纏めて歸國することゝなつた。即ち三月一一日、フオークストオンを出立、二一日巴里、二二日マルセイユに着き、二五日に乘船、五月一一日に横濱についた。一八七八年、即ち明治一一年である。

（1）Lawder. E. 明治初年英領事として神戸にあり及横濱において辯護士となつた人ならん（『明治文化發祥記念記』大正一三年一二月發行）

（2）とゝに擧げた英人名、地名等は、自傳にある通りとした。以下洋人名も同樣。

（3）安永恭郎著『馬場辰猪』三九頁。

（4）山田孝雄著『國語學史要』二九九頁（岩波全書版、昭和一三年八月三版）

（5）前同書二九八頁

（6）同　書三〇〇頁

（7）自傳（『改造』大正一三年一二月一日發行）

（8）馬場孤蝶「日記を通じて見たる馬場辰猪」（『雄辯』十周年記念號（第一一卷二號大正九年二月一日發行）

（9）寺石正路著『土佐偉人傳』四六一―二頁。（大正三年六月、澤本書店）

## 5　共存同衆における活動

辰猪が歸朝して三日、即ち明治一一年五月一四日には、時の内務卿大久保利通が紀尾井坂で、石川縣士族島田一郎に刺殺された。辰猪は、この事件を通じ、また當時の國内情勢を觀察して「日本の將來の狀態が少し形をなし始めた」[1]と考え「日本は總ての文明國民の歴史には表はれてゐるところの危機にだん〳〵近づきつゝある。」[2]とし、さらに「人民が次第に政治上の一要素をなしつゝあつて、政治家等は、その國を治めやうとする場合には人民の向背をば考慮のなかに入れざるを得ないようになりつゝ」[3]あると思つた。そして彼は、かくの如き民主政治の發達には、まづ國民を啓蒙すること、輿論に訴える機關を設けることの必要を痛感した。

かういふ理由から、まづ、共存同衆で公開講演を催すことになつた。共存同衆は明治七年九月に組織されたが、辰猪の渡英中も、堅實に發展してゐた。そして辰猪が歸朝した明治一一年に入ると共に活動を活潑にした。

共存同衆といふ字の意味について『小野梓傳』の著者故西村眞次博士は共存とは社會、同衆とは協會といふほどの意であつたろうとされている。[4]これから推しはかると「共存同衆」とは「社會協會」の意味となるのであるが、馬場孤蝶によれば「ミューチュアル・アッソシエーション」の意味であるといつている。[5]「ミューチュアル・アッソシエーション」を「共存同衆」と譯したとすれば、そこに譯語の苦心もうかゞわれる。

辰猪は、前述のように歸朝ののち、共存同衆の講演を公開することに努力し、小野梓とともに最も度多く講演を行つている。彼の共存同衆における公開講演は、社會上、法律上、政治上の諸問題におよび、五十回に上つている。なかでも、羅馬法に關しては十七回連續の講演であつた。同衆における彼の講演は多く『共存雜誌』に掲げられており、羅馬法に關するものも「羅馬律略」として同誌に連載された。辰猪はこの會における講演は、後のものにくらべて一層通俗的で啓蒙的であるが、それは辰猪の眼に映じた大衆の意識がなおこの程度の説明を必要としたほど低いものであつたことによるものと思う。しかも、社會科學上の問題を説くために、つねに、物理とか化學とか自然科學上の法則に基づいて推論した。辯證法は把握していなかつたようだが、一種の唯物論者であつたことはうかゞえる。

ともかく、共存同衆の公開講演は、世上に公開講演の風潮を流行させる機縁となつた。役人でさへ政府批判の演説をやるようになつた。自分の職分や地位がもたらす特權についてなお封建的な意識の强かつた主要官吏は、かゝる傾向が、所謂絶對君主制の存續をあやぶくするという見地から、政府吏員が許可なくして公開講演を行うことを禁ずるといふ方策をとつた。これは、のちに法文化した。ところがこれは共存同衆にとつては、



極めて重大な打擊を與えた。もと〳〵共存同衆には歐米留學からかえつた新知識が多かつたが、かゝる新知識は多く政府の役人であつた。まことに馬場を除いては同衆の主要人物は官吏であつたのである。であるから、政府のこの措置は、共存同衆等の政治的、社會的啓蒙運動に大きな支障を來したことは明かである。辰猪もこのことについて云つているが、共存同衆の指導者小野梓もその日記の明治一二年五月一一日の條に「聞く政府尚官吏の講談するを禁ずと。是れ鼠輩が予の世間に勢を得るを畏れ、この姑息の處置を爲す。蓋し是れ亡滅の基なる乎。吁々惜むべし。予輩すら畏ろしくては、最早もてかぬるべし。惟ふにこれは井上氏のこそくりなるべし。明日出仕、明了にすべし。勢によつては辭官すべし、……馬場を訪ふ。」[6]とあり、また同じく「四日の條に「……歸路衆館に入り、同衆の講談に列す。併し官吏の講談を禁止する愚法に束縛せられ、非三大政權を講ずるを得ず。是れには甚しき關係あれば、自身尚辭職の積なり。但し、諸友尚暫くまてと申し居る。……」[7]とある。小野の憤激がほゞ窺い知られる。小野は結局、所謂明治一四年の政變まで在職し、明治一四年一〇月二五日まで在官した。かゝる結果として、小野在官中における共存同衆の公開講演には常に馬場が中心となつていたのではないかと思われる。

ついでながら、政府の右の處置では、それまで、法律、政治、思想の啓蒙に努力してきた嚶鳴社も非常な打擊を受けた。嚶鳴社員の三分の一は官吏であつたからである。その指導者沼間守一は、この處置に憤懣おく能はず、その直後の會同において、その次第を發表したところが、來會者競つて嚶鳴社員となり、却つてその勢力を强化することが出來たと傳えられている。而して沼間は遂に意を決して官を去り、一方において嚶鳴社を率い、一方において『横濱毎日新聞』を率い、これを東京に移して『東京横濱毎日新聞』と改題、嚶鳴雜誌を發行して、自由民權思想の鼓吹に奔走努力した。

（1）自傳（『改造』、大正一三年一二月一日發行）
（2）同
（3）同
（4）西村眞次著『小野梓傳』（昭和一〇年一二月四版、富山房）
（5）馬場孤蝶「共存同衆の功績」（月刊『明治文化研究』第四卷第五號　昭和三年五月一日發行）
（6）（7）西村眞次編『小野梓全集』下卷三二六、三二七頁。（昭和一一年五月　富山房）

## 6　國友會組織

前節で述べたように官吏の公開演説禁止は、我が邦の政治思想啓發運動を目的とする各種團體には打擊にはちがいなかつたが、更にきびしい壓迫を與えたのは明治一三年四月二日公布せ

られた太政官布告第十二號の集會條例である。この條例は、政治に關する事項を講談論議するため公衆を集める場合、同樣の目的で結社する場合には屆出認可を要するとなし、演說會又は結社の解散を命じ、演說者に對しては一年以內その管內での公衆に對する演說を禁じ得ることを規定した。またこの條例は陸海軍人（常備豫備後備の籍にあるもの）警察官、官公私立學校教員生徒農業工藝の見習生にかゝる演說を聽くこと又は結社に加入することを禁じ、政治に關する事項を講談論議するためその旨趣を廣告し又は委員、文書を通して公衆を誘導し又は他の社と連結したり通信往復することを許さず、また屋外に於ける政治演說を禁止している。これがためにそれまでに存在した各種の政治運動、政治思想啓蒙を目的とした團體、結社が恐慌を來したのは當然であつた。この種の有名な團體であつた嚶鳴社にしても三田協議會にしても共存同衆にしても、一應態勢を改めねばならなかつた。即ち例へば共存同衆では明治一三年四月一四日の常例講演會の廣告文に附言して「本衆は自今專ら學問上の事項を講談し、政治に關する事項を講究するを爲さゝれは今之を附して聽者に便す」[1]と斷つているほどある。三田演說會は例會を休み嚶鳴社は會則變更の會合をもつた。

辰猪がその自叙傳のなかで、政治的啓蒙演說をなすために同衆以外の會合を持たねばならなかつたと述べているのはこの時のことであろう。馬場の共存同衆員としての活動は、それでも、



なほ熱心に續けられたが、その講演內容は、大體學術上の問題に限られたようである。例えば「魔術論」「占卜論」「謙遜論」「困難論」「有功論」「成功論」「熱心論」「交際論」「書生論」「異說論」といつたような風である。唯しかし、恐らくはその內容に於て自由民權思想が寓せられたであろうことは想像される。

さて、右の集會條例のよつて政治上の演說や討論を行ふために各種の團體が現はれた。先づ嚶鳴社は會則を變更して別に政談東京演說會といふのを組織した。大體、明治一三年七月頃である。そして、この中心人物は沼間守一、田口卯吉、肥塚龍、末廣重恭であつた。

共存同衆では、別動隊を作るといふようなことはなかつた。しかし、馬場としては、政治的な啓蒙運動を止めるつもりはなく、自由民權運動へ一歩々々近づいていたのであるから、どうしても、さういふ團體を必要とした。そして自ら中心となつて政談討論演說會なるものをこしらえた。私の見たところでは明治一三年七月四日兩國の中村樓で開いた會合が、その最初の頃のものであつたらしい。このときには演說討論政談會と呼んだ。この會に出た辯士は岡崎龜雄、林欽亮、高木喜一郎、猪飼麻二郎、波多野承五郎、箕浦勝人、犬養毅、永井好信、藤田茂吉、馬場辰猪であつた。これらの人々は慶應義塾出身者である。その中には、のちに改進黨員となつた人々が多いことも眼につく。これらの人々と辰猪とでは、政治上の意見も一致せぬ點もあり得たであろうし、從つてしつくり一つにまとまることが出來なかつたらしい。辰猪が同月一〇日に行われた前述の東京演說會にも出たことなどは、當時の辰猪が、この方向に於ける活動においてはつきりと決心もついていなかつたし、また基礎もなかつたことを示すものと考えられる。しかも、慶應義塾出身者中心の政談討論演說會にも東京演說會にもあきたらなかつたらしい。そこで、七、八兩月、猛暑で演說會など休會の多かつた間に政談討論演說會に屬するメンバーを更新したらしい、そして九月に入ると共に政談演說會を開いた。その顏觸は元田直、大石正巳、奧宮健之、田口卯吉、佐伯剛平、西村玄道、馬場辰猪という風に、のちに自由黨へ行つた人が多くなつてきて、岡崎龜雄、林欽亮、高木喜一郎、猪飼麻二郎、箕浦勝人、永井好信、藤田茂吉などは、九月以降の會には名を見られなくなつた。犬養毅、森下岩楠、門野幾之進などなほ二三回その名を見せてゐるが、それもその後は、その姿を消したらしい。かようにして、政談討論演說會は次第にその結合を固めて行つた。この會の名も初めから一定していたのではない。單に「政談演說會」といい、或は「政談演說並討論」「政談演說討論」などとしてあつて果して固有の名稱として使用したのか否かも決定することが出來ない。が、大體、同年一一月の初には政談討論演說會といふ名が固有の稱呼となり義塾出身以外の人も會員として迎えることになつた。嚶鳴社の末廣重恭や田口卯吉等もこの會に望んだ。

かくて、この會は馬場、大石、末廣を中心として、次第に發展して行つた。それはこの會にはインテリ青年の論客が多く、從つて論調も活潑であり、思想も幾分急進的であつたからである。そして、[2]明治一四年四月に、國友會となつた。國友會は同年一二月、純然たる政談社としての組織をとり、國友社と改めた。國友會という名稱は、辰猪のいう所では、革命時代の佛蘭西の新聞「人民之友」からヒントを得て、人民の友の會の意をもたせたものであるという。[3]こういう一つの名づけかたについても、彼の急進的な氣持がよくわかると思う。國友會員の主な人々は、馬場辰猪、田口卯吉、大石正巳、鈴木券太郎、堀口昇、西村玄道、本多孫四郎、佐伯剛平、末廣重恭、淺野乾、高橋基一、門田友太郎等であつた。末廣はこのとき嚶鳴社を脫して正式に國友會員となつたのであつて、親友であり、同志であり、同じく朝野新聞の記者であつた高橋、淺野、門田を率いて馬場と合流したのである。國友會は淺草井生村樓を根據として毎月二回乃至數回の演說討論會を開いて大衆の政治的啓蒙運動に努力した。勿論、地方の有志の要請に應じて、辯士を送り、地方の政治思想の啓發に努力した。馬場自らも、千葉や、山形や、長野地方へ遊說に出かけている。殊に山形への遊說は、明治一四年五月五日より五十有餘日に亘り、遊說地も信越に跨ってい

た。彼は信州小諸に於ては遂に演說が當局の忌避に觸れ、同行佐伯剛平と共に小諸署に一週間も留置せられ且つ縣下における政演談說を一ケ年禁ぜらるゝに至つた。

（1）『郵便報知新聞』明治一三年四月一三日。

（2）柳田泉著『政治小說研究』中、四〇四頁。（昭和一〇年一〇月。春秋社版）

（3）自傳（『改造』、大正一三年一二月一日發行）參照。

## 7　明治義塾

辰猪は以上のように政治運動に熱心していた一方、青年子弟の育成にも心を用い、同志とともに、明治義塾を開いて、法政、經濟、等の諸學を授けることゝした。彼と明治義塾との關係、明治義塾の歷史については、あまり明確ではない。

以下、當時の新聞から、若干の記事を引用して、一應の說明とした。

その創立が明らかにされたのは、明治一四年八月で、その開設廣告には「今般同志相會し學校を創立し之を明治義塾と名け英書を以て政治、法律、經濟の三科併に漫書算術を敎授す有志の諸君は九月十日より來る十月十日までに左の番地へ御申込あるべし、但十月十五日開校の事」[1]とあり、その發起人には馬場辰猪、秦野重太郎、武藤常德、西本正雄、柿內正輔、豐川良平、大石正巳、谷乙猪、齋藤修一郎の九名の名が列ねられた。塾の位置は神田錦町二番地である。これよりさき、神田今川小路二丁目十四番地に英漢義塾と稱する學塾があつたが、之を合併して明治義塾が開かれたのである。

この方面の私學として明治一三年には專修大學の前身たる專修學校、明治一四年一月には明治大學の前身たる明治法律學校が開かれていた。前者は法學を缺き、後者は佛法を主とした。馬場等は英語を以て、英法を主としたのみならず、專門の範圍は、政治、經濟にも及んでいる。この塾が他の學校のように成長しなかつたのは、如何なる理由によるのか、一說には明治義塾は英吉利法律學校（中央大學の前身）の前身であるといい、或はまた杉浦重剛の日本中學校の前身であるとの說がある。暫らく後考に委すことにする。

當時の報道では、開校直後は入學志望者も多く、明治一四年一月には、敎員として文學士千頭淸臣、同福富孝季、漢學者南摩羽峰の三人を招聘したことを報じ、一年後の明治一五年一一月二八日の『朝野新聞』では、「明治義塾は有名なる敎師も多く授業の行き屆くにより生徒も日に增加の勢ひあり因て更に豫科敎授法を改め東京大學豫備門を始め其の他英語の專門學校に入る諸科を敎ふる爲め此度敎師數名を雇入れ來年一月より之に從事せらるゝと聞く。」とある。『朝野新聞』は、馬場等の據つた新聞である以上、或はその報道を文字通りに信ずることは出來ぬかも知れぬ。馬場は政治運動に重點をおいていたときであるから、或は義塾の方に充分の力を注ぎ得なかつたかも知れない。こう考へて來ると、朝野新聞の右の報道からは、明治義塾が、今日のいわゆる豫備校的存在に向つていたのかも知れないとの懸念も生ずる次第である。

明治一六年四月一九日の『時事新報』では、同塾內に法科專門の科をおき、代言人養成に志した如くである。曰く「今度神田錦町の明治義塾內に設置なりたる法律研究所は、五月一日より生徒の入學を許される由なるが、右は馬場辰猪、高橋一勝、武山助雄の三氏にて斡旋し、馬場氏は現行法に熟したる人なれば、其の學則も正しく講習も行屆き、生徒の此に輻輳する者必ず多く他年良狀師を出すに至る可きか。」と。

明治一五年後期の學科配當は、左の如くであるが、これによつて見ると當時の同塾は豫科二年本科三年の課程で、各學年をそれ〳〵前期・後期に分けていた。豫科の學科は不明である。

本科三ケ年の學科[2]

第一級前期

| | |
|---|---|
| マコーレイ氏 | ハラム氏英國憲法史評論 |
| デグィンシー氏 | チャーレス・ランブ傳 |
| ケヤン氏 | 理財論法 |
| ゼボーン氏 | 貨幣論 |
| ミル氏 | 代議政體 |



| | |
|---|---|
| ケヤン氏？ | 證據法 |
| | 哲學史 |

第一級後期

| | |
|---|---|
| デグィンシー氏 | チャーレス・ランブ傳 |
| エマスン氏 | 敎育論 |
| ケーリー氏 | 經濟書 |
| ボーエン氏 | 經濟書 |
| ケーリン氏？ | 公平裁判法 |
| リーバー氏 | シビル・リバーチー |
| スペンサー氏 | 社會學 |

第二級前期

| | |
|---|---|
| 釋譯 リービング氏 | アッドレッス |
| 經濟 ミル氏 | 經濟書 |
| 法政 ベンザム氏 | 立法論綱 |
| 法政 バゼホット氏 | 英國憲書 |
| 哲學 ヘボン氏 | 心理學 |
| 同 ベイン氏 | 心理學 |

第二級後期

| | |
|---|---|
| 釋解 スペンサー氏 | 干涉論 |
| 同 チングル氏 | ベルフアスト・アッドレッス、 |
| 經濟 ミル氏 | 經濟書 |
| 法政 バゼホット氏 | 羅馬律 |
| | 憲法書 |

哲學　ミル　氏　實利學

第三級前期

釋解　マコーレー氏　ベスチング傳

同　スペンサー氏　代議政體　三時間（前者とともに……著者西田に）

經濟　ゼボン氏　經濟初步

同　ホーセット氏　經濟書　三時間

法政　アモス氏　法理・英國憲法書及各國憲法　四時間

哲學　ハクスレー氏　理科學初步

同　ゼボン氏　論理學　三時間

第三級後期

釋解　スペンサー氏　代議政體

同　マコーレー氏　ミルトン傳

經濟　ホーセット氏　經濟書

法政　契約

同　アモス氏　憲法書

哲學　ゼボン氏　論理學

（1）『朝野新聞』明治一四年九月二八日第二四〇九號

（2）同　新聞　明治一五年七月二九日第二六三九號

資料

# 米國南部の經濟に對するTVAの影響

飯島瑞子

## 一　序

米國南部には相當の工業の發達も見られるが、全體としては尙農業地帶を形成している。そして近代資本主義が自由資本主義の形態をとりつつ發展してゆくのにほぼ理想的な條件を具えた後進地域の工業化という見地から、好個の事例を示している。後進地域に一般的な諸條件、即ち、過剩勞働力殊に農業人口の急激な增加、低い勞働生產性、農業その他の產業部門における熟練勞働力の缺如、文盲、惡い衞生保健狀態、資本の不足、組織化されず且つ操業度の低い小企業の散在、無知や怠慢により天然資源が甚だしく消耗していること等の諸條件は、米國南部經濟の發展にとつて障碍物となつている。それにも拘らず過去二十年間に南部の個人所得は、米國全體の平均の約半ば程度の水準から一九五一年には三分の二に近い水準にまで上昇した。この間前大戰中における戰時經濟という要素も一つのファクターであつたことは勿論であるが、かかる顯著な經濟發展に對してTVAは直接間接に廣汎な影響を及ぼしていると見られる。

TVAは、大不況の激化した一九三三年六月三十日、米國議會を通過成立した法律に基いて設立された政府企業であり、特定の地域に限定されたこの種の政府企業としては最初のものである。その目的は、ケンタッキー、テネシー、ジョージア、アラバマ、ヴァージニヤ、ノースカロライラ、及びミシシッピーの七州にまたがる約四萬二千平方哩、人口約二百萬を擁する地域における天然資源を、所在の勞働、資本、及び地方行政機關と緊密に協力し、その福祉便益を圖りつつ、「適正に利用し、保全し又發展させる計畫について最も廣汎な任務を擔つて」(1)……「集中された權力を地方行政機關に分權して管理する」(2)ことにある。尙これ等の七州は通常「南部」と總稱される地域の內では、色々の意味において特に同質的な經濟構成をもつている。

TVAの創業資本の大部分は米國議會の承認を得た連邦政府の豫算支出であり、それ以外としては六千五百萬弗のTVA債と電力消費者から徵集した電力料金五千萬弗とがある。年々の運轉資金は議會の承認を得て連邦政府が支出している。TVAは、大統領及び議會に對して直接責任を負つている三人の理事から成る三人委員會が管理の權限をもつている。その事業の對象は、洪水の防止、河川航運の開發、水力發電、化學工場の運營、肥料及び軍用資材の調査製造、農、林、鑛產資源及びリクリエーション施設の開發、河川衞生及び公共保健、漁獵資源の調査、その他特殊の研究や活動の指導等極めて多岐廣汎にわたつており、各分野において業績を擧げている。殊にTVAが南部經濟一般に新たな分野を開拓した點が注目され、これに關しては統計的にも直接立證し得るところが多い。

問題は、TVAが南部十三州殊に直接關係の深い諸州の經濟に對して直接間接にどんな影響を及ぼして來たであろうか、換言すれば、TVAは資本主義の枠內で後進地域の工業化を促進するという目的を果して來たであろうか、という點にある。

（1）TVA Democracy on the March p. 47.

（2）ibid. p. 142.

## 二　勞働

南部の人口過剩は慢性的症狀である。この地域の人口は米國全人口の約五分の一であるのに、毎年の人口增加は全國の人口增加數の三分の一を占めている。特にテネシー・ヴァレイ地域では一平方哩當り六十三人の人口密度を示し、これは米國全體の平均人口密度四十四人に比べて略ゝ五割方高い。そして工業勞働力に對する需要が少いため、尨大な勞働力の慢性的供給過剩を來し、北部や西部へ職を求めて移住して行く者が毎年十三萬人以上に達する。この現象は、戰爭中南部でも戰時增產による勞働需要が增大したにも拘らず繼續し、大戰の四年間に西部